

いにしえびとに思いを馳せて

自然の名前を探しに行こう

日本には雨を表す言葉が四百以上、伝統色に至っては千以上あるという。それは、豊かな自然と日本人の繊細な感性から生まれたのではないか——美しい風景と大和言葉をごよなく愛する北山建穂さんはそう語る。そんな北山さんが考える、「和の名前」を知る楽しさとは？

四季彩写真家

北山建穂

●きたやま・たてほ 1974年栃木県日光市生まれ。風景写真で日本の伝統色をつづった『四季彩図鑑』が第3回写真出版賞を受賞し、2021年みらいパブリッシングから出版。続編『百色図鑑』『四季彩図鑑 雨と風と光の名前』と共に全国学校図書館協議会選定図書に選ばれた。

伝統の色と言葉に魅せられて

日本は豊かな自然に恵まれていますが。私が生まれ育った栃木県の日光市も風光明媚で、季節の移り変わりを五感で味わえる地域です。

自然は色彩にあふれ、一秒ごとにその色合いが変化していきます。そうした一瞬の色を切り取って名前を

調べていくうちに、オリジナルな和色のカラーチャートができました。色と名前だけでは味気ないので、その色が写っている風景写真を添えるようになったのですが、それが何冊かの本をつくるきっかけとなりました。

実は、写真は昔から好きだったわけではなく、必要に迫られて始めたんです。仕事で日光市内の風景や名

所旧跡の写真を撮影することになり、初めてデジタル一眼レフカメラを買ったのが二〇〇八年。撮影しているうちに、どんどんその魅力にはまってしまう……。

地元・日光を中心に、自然の風景の中にある日本の伝統色を見いだしながら撮影を続け、色の名前をテーマに『四季彩図鑑』を、続編として『百色図鑑』を、みらいパブリッシ

ングから出版しました。

そして、自然の名前で風景をつづったのが、三冊目の『四季彩図鑑 雨と風と光の名前』です。

もともと日本の古典が好きで、『万葉集』や『源氏物語』などを読んでいました。かねてから、こうした文学に出てくる花鳥風月の名前や自然の移ろいを表す言葉を美しいなと感じていたこともあり、そうした言葉を、折々の風景とともに残したいと思ってつくった一冊です。

雨で感じる季節の移ろい

俳句をたしなむので、季節を表す言葉に親しんでいたことも企画を思いついた背景の一つです。風や雨などの事象を表現した季語がたくさんありますから。この本では、「雨」「風」「光」「月」「星」の五つの章で、古から伝わる春夏秋冬の自然や色の名前を紹介しています。

●表紙

●春桜風



『雨と風と光の名前』表紙

『雨と風と光の名前』の表紙には、クモの巣に付いた、たくさん水滴を写した写真を使っています。梅雨のさなかに咲き誇るアジサイの中で撮りました。よく見ると、小さな水の粒の一つひとつにアジサイの花が写り込

んでいます。この写真は、長く続く雨の名前「長梅雨」とともに「雨の章」にも掲載しました。日本には雨の名前だけで四百種類以上あるといわれています。たとえば「時雨」は、突然降り出してさっと止む雨。本来は晩秋から初冬にかけて降る通り雨のことですが、桜の花が咲くころは「花時雨」、秋の終わりに降れば「秋時雨」、夜に静かに降るのは「小夜時雨」など、降る季節や時間帯などによって多彩な表現があります。

しとしとと降る細かい雨は「小糠雨」「ひそか雨」などと呼ばれますし、か細い雨は光る糸にたとえて「糸雨」と名付けられています。

雲がなく晴れているのに降る雨は一般的には「天気雨」といいますが、「天泣」ともいうんですね。天が泣いているなんて、本当にきれいな言